

大山街道八王子道ウォーク第1回熊谷駅から上岡バス停計画

2020年2月24日 作成

歩行距離 約10.0km。

集合場所 熊谷駅改札口

集合時間 午前9時30分

第1回熊谷駅から上岡バス停

実施日 2020(令和2)年2月19日(水) 天候 晴

参加者 折本 文夫、杉田 勝行、中田 信義、中島 征雄 計 4名



コース 熊谷駅～中山道～札の辻跡～本陣跡～熊谷寺～伊奈利神社～旧中山道跡碑～八木橋百貨店～旧中山道跡碑～鎌倉町交差点～星溪園～荒川大橋～荒川大橋橋門構～九頭龍大権現祠～石尊宮常夜燈～和田吉野川(吉野橋)～地藏尊～橋供養石碑～和田川(和田橋)～地藏尊・如意輪観音～地藏尊・庚申塔～妙安寺～上岡の馬頭観音～上岡バス停⇒東松山駅

GPSデータ

歩行距離：9.9km。

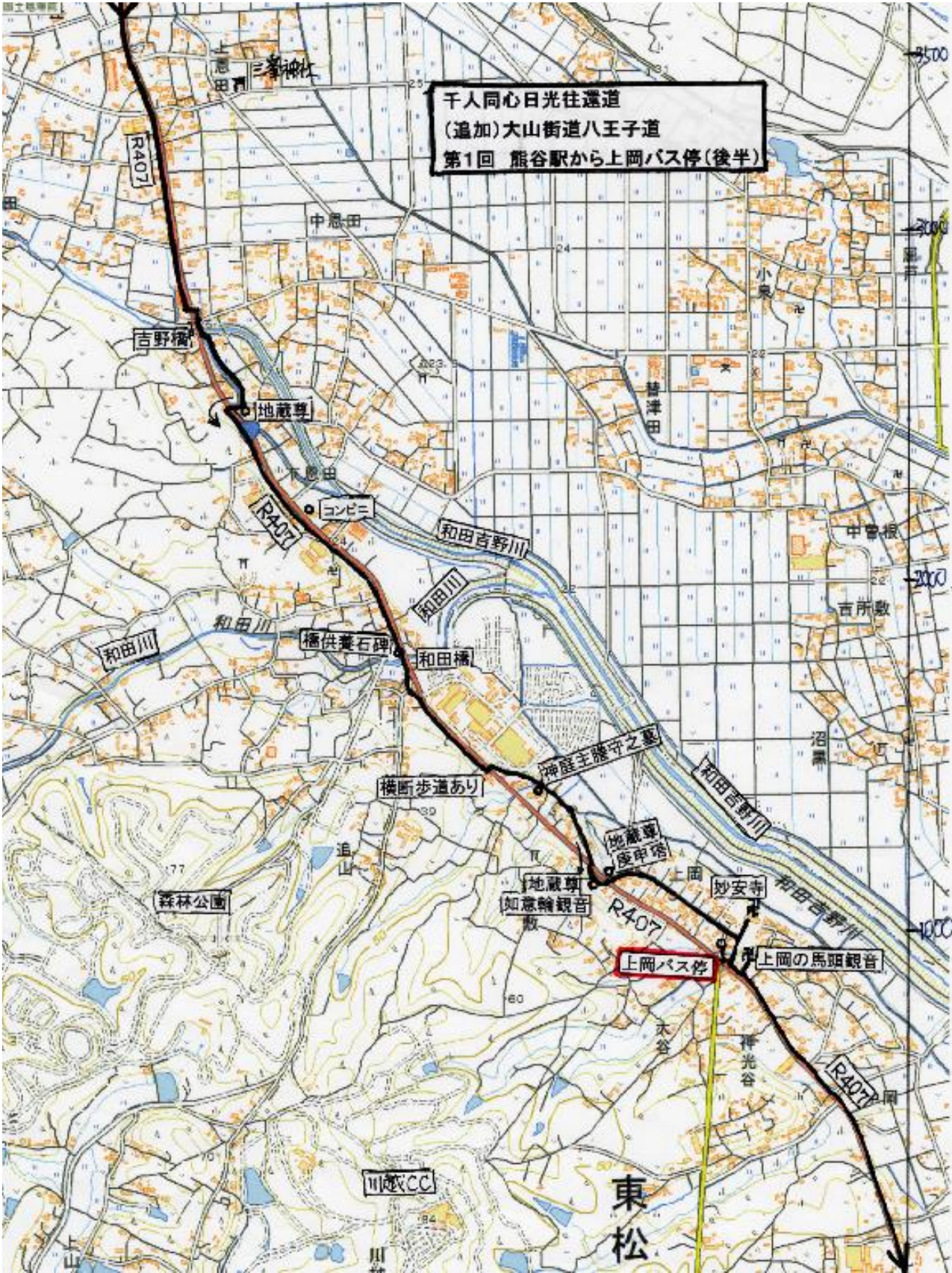
全体所要時間：3時間27分。

移動時間：2時間35分。

停止時間：52分。

移動平均速度：3.8km/h。

全体平均速度：2.8km/h。



使用している写真は、２００６（平成１８）年１１月１０日、２０１８（平成３０）年１１月１６日、２０１９（平成３１）年４月２８日、２０２０（令和２）年２月１９日に撮影したものです。

熊谷駅を9時34分出発。晴れているが風が冷たい。駅前のロータリーの真ん中に熊谷直実の騎馬銅像があり、ラグビータウン熊谷の表示が目につく。



駅前通りを直進し、国道17号線・中山道に出て左折。広い市役所通りを横切った先右手に、高城神社社名石柱と鳥居が数基ある長い参道の奥に古社「高城神社」本殿がある。(今回は寄らない)

80m程先の車道側に「中山道と熊谷宿」と「札の辻跡」の説明板と札の辻跡と刻まれた石柱がある。(9:47)



中山道と熊谷宿

熊谷を通過していた「中山道」。中山道は古くは東山街道と呼ばれていた。慶長六年(1601)に江戸幕府により宿駅・伝馬制度が整備された五街道の一つで、日本橋から京都三条大橋までの約532km、六十九宿(草津と大津の宿は東海道と重複)の行程であった。

「熊谷宿」は、六十九宿のうち、(江戸・日本橋)から板橋、蕨、浦和、大宮、上尾、桶川、鴻巣の後に至る八番目の宿場町であった。江戸時代、中山道と久下の長土手を描いた溪斎英泉「熊谷宿八丁堤景」からもその様子を見ることができる。寛文年間(1661~72)の熊谷の古地図には、宿場は東西九町六間(約992m)との規模が示され、寛政一二年(1800)の「熊谷宿往還通明細書上」には、戸数が937戸、人口が3276人と当時の状況が記されている。

当初、本陣は本町一丁目の竹井新右衛門家と本町二丁目の鯨井久右衛門家の二軒であったが、享保八年(1723)に竹井家だけとなった。その後、竹井家の他に、安永年間から石川藤四郎家が本陣を担うようになった。

竹井家は、天正年間から熊谷にて代々本陣を務めた旧家として知られている。竹井本陣は、明治一七年に門を残して焼失し、後年、縮小して建替えられたが、昭和二十年の戦災で再び焼失した。嘉永二年(1849)の竹井本陣を描いた「本陣絵図」によると、面積は4960㎡、建築面積は2281㎡、畳数103畳で、全国でも屈指の規模を誇っていた。

熊谷宿の歴史は、「六斎市」や「熊谷八坂大祭（うちわ祭・熊谷八坂神社祭礼行事）などの祭礼とも関わりが深い。江戸時代、周辺の村々から生産された農作物や木綿織物などを売る市場が中山道の両側に作られた。高城神社や熊谷寺の門前市も開かれ、六斎市が人々の間に定着されていった。また、熊谷八坂大祭は、愛宕神社に合祀された八坂神社の祭礼で、江戸時代初期には各町内で催されていた。その後、寛延三年(1750)、町民の請願により全町一斉での神輿渡御が開始された。江戸時代後期には、赤飯ふるまいが熊谷宿の風物詩となる。明治時代になり山車・屋台の巡行が始まり、祭礼の名称となるうちわの配付が人気を博した。この華やかな祭礼行事は中山道と共に育まれ、現代へと継承されている。

その他、中山道沿いには、札の辻跡や久下の権八地蔵、英泉の絵に描かれた「みかりや」、竹井本陣の別邸として築かれた「星溪園」、秩父道志るべ、新島の一里塚などの文化遺産があり、街道の歴史を今に伝えている。

平成二十八年三月一日 熊谷市教育委員会

札の辻跡 （熊谷市指定文化財 史跡）昭和二十九年十一月三日指定

札の辻は、高札の設置場所で、高札場と言われた。高札は、掟・条目・禁令などを板に書いた掲示板で、一般大衆に法令を徹底させるため、市場・街道など人目を引く所に掲示された。

熊谷宿の高札場は、宝永年間に記された「見世割図面写」により、場所・大きさなどが推定できる。場所については、「町往還中程に建置申候」と記され、木柵で囲まれた屋根のある高札場が描かれている。この説明から、高札場は現在の大露路通りと中山道の交差する道の中央辺りにあったことが推察できる。高札は、高さが一丈一尺（約2.3メートル）、横幅が六尺四寸（約2メートル）の大きさであった。高札十四枚は市指定文化財として保管され、中山道の歴史を知る資料となっている。札の辻跡は、中山道の記憶を今に伝える史跡として貴重な文化財である。平成二十七年三月 熊谷市教育委員会

大露路通りの先80m位の車道側に「東京から66km」の標柱がある。直ぐ先の瓦屋根の「熊谷寺前」バス停の先の車道側に「本陣跡」の説明板と石柱がある。



本陣跡 （熊谷市指定文化財 史跡）昭和二十九年十一月三日指定

本陣は、江戸時代初期の寛永十二年(1635)、諸大名に対する参勤交代制度が確立されてから、各街道の宿場町に置かれた休泊所である。諸大名や幕府役人、公家貴族などのための特別な旅館でもあり、門・玄関・上段の間を設置することができ、旅籠屋などの一般の旅館とは区別されていた。また、本陣を担った経営者も土地の豪家で名字帯刀を許されることが多かった。

熊谷宿の本陣のうち、街道の南側、本町一丁目の西端に位置していたのが「竹井本陣」であった。敷地1600坪、建坪700坪、47部屋を有する、国内屈指の規模を誇る本陣だった。しかし、明治の火災と、終戦前夜の空襲で失われ、現在では本陣跡が残されるのみとなった。本陣の西には、竹井本陣別邸だった市指定名勝「星溪園」があり、その当時の面影を今に伝えている。

平成二十七年三月 熊谷市教育委員会

鎌倉町交差点で国道を渡り、直進すると、熊谷直実ゆかりの「熊谷寺（ゆうこくじ）」と「伊奈利神社（奴稻荷・弥三左衛門稻荷）」がある。

熊谷寺



熊谷寺（ゆうこくじ）

熊谷寺は、蓮生山当行院と号し、浄土宗の寺。本尊阿弥陀如来像は恵心僧都の作と伝わる。熊谷直実（法名蓮生）が出家後、元久二年(1205)、彼の旧居に蓮生庵として創建したと伝えられます。その後、天正年間に熊谷寺として中興、慶長九年には、徳川家康より三十石の御朱印領を拝領。



伊奈利神社（奴稻荷・弥三左衛門稻荷）

□ 御祭神 ・倉稻魂命（うかのみたまのみこと） ・東照大権現（徳川家康公）

□ 御由緒

当社の創建は、元久二年（1205・鎌倉）である。

稲荷神を深く信仰していた熊谷次郎直実公は、戦いで数々の危難に遭っても弥三左衛門という武者に助けられ、武勲を上げた。余りの不思議さに直実公が弥三左衛門にその素性を尋ねたところ、「吾は、汝が信ずるところの稲荷明神なり。危難を救わんがため弥三左衛門と現じけり」と言い、忽然と姿を消した。その靈威に感じた直実公は、帰陣の後、熊谷寺境内に祠を設け稲荷神を祀り、居城の鎮守とした。こうしたところから弥三左衛門稲荷とも呼ばれた。

その後、慶長年間（1596～1615・桃山）に熊谷寺中興の祖「幡随意上人」が社殿を再建し、享保四年（1719・江戸）には、正一位の神階を受けた。

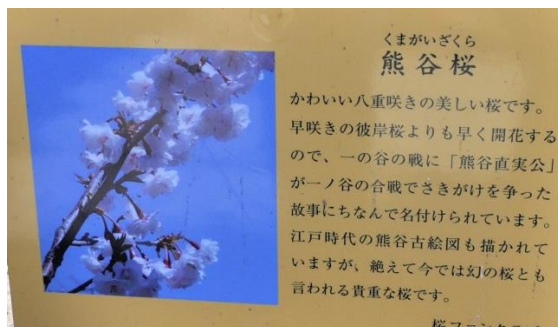
明治に入ると、神仏分離によって熊谷寺の管理を離れ、明治二年鎌倉町の愛宕神社境内に遷し祀るが、明治三十一年九月に仲町氏子等の願い尽力により、旧社地（現在地）に遷座され深く信仰され現在に至っている。

□ 信仰

「奴稲荷」の通称と共に当社は、子育て稲荷として名高く、関東一円に亘り崇敬者がおり、その靈驗はあらたかであるという。病弱な子供は稲荷神の家来（奴）と称し、三年とか五年とかの期間を決めてその間月参りを欠かさず行えば必ず丈夫になるといわれ、その期間中は稲荷様に奉祀している証としてもみあげ（奴）を伸ばし、丈夫になり満期を迎えるとそれを切って神前に奉納する習慣があった。このような習慣により奴稲荷と呼ばれている。（後略）



境内に熊谷桜が植えられている。



国道に戻ると、八木橋百貨店の東口前に「旧中山道跡」と彫られた石碑があり、裏面には説明文が彫られている。また、傍に宮沢賢治の句碑がある。（10：04）



八木橋百貨店



旧中山道跡石碑



宮沢賢治句碑（表）



句碑（裏）

旧中山道跡の石碑説明

江戸時代ここに中山道が通っていました。

中山道は東海道と共に、江戸と京都を結ぶ重要な街道で、五街道の一つにあたります。

江戸、日本橋を起点に、近江国（滋賀県）守山宿まで六十七宿ありますが、普通、東海道と重なる草津・大津の二宿を加え中山道六十九宿とよんでいます。（草津まで一二九里十町八間＝約五〇八キロメートル）。また、この街道は木曾を通る事から木曾街道ともよばれました。

東口の碑は、ここから南へ通じる石尊街道（鎌倉街道）の入口にあたります。

西口の碑は熊谷宿の西端にあたり、ここから北へは新田道（太田道）が通じています。

平成三年八月二十六日 熊谷市文化連合
熊谷市郷土文化会
株式会社八木橋

白汀 野口 林造 書
石匠 野口 大作 刻

宮沢賢治句碑

（表）「熊谷の 蓮生坊が たてし碑の 旅はるばると 泪あふれぬ」

（裏）「武蔵の国 熊谷宿に 蠍座の 淡々ひかりぬ 九月の二日」

この歌は、1916年9月に、宮沢賢治を含む盛岡高等農林学校2年生が、秩父地域の地質巡検のため熊谷に宿泊した際に詠まれたものです。9月2日に熊谷寺を訪れ、「蓮生」の歌を詠み、宵闇のころ西空に沈もうとする蠍座を見て「武蔵の国」の歌を詠んだと言われています。

9月2日は、現在の熊谷市本町にあった旅館松坂屋に宿泊し、翌日は熊谷から秩父鉄道で寄居に向かい、「立ヶ瀬断層」「象が鼻」などを観察しました。

ちなみに、賢治が泪した「蓮生坊がたてし碑」は現存せず、熊谷から9月2日に蠍座が見られるのは、午後7時30分から8時30分に限定されるとのこと。

八木橋百貨店に入ると、店内の化粧品売り場の通路は斜めに走り、西口に向かう。西口には「旧中山道跡」の石柱がある。中山道は、県道を横切って、Y字の右の道に行く。





鎌倉町交差点に戻り、南下する。この道が石尊街道で、大山街道であり、鎌倉街道である。町の名前は、中山道熊谷宿から鎌倉へ行く鎌倉道の入口であったのでその名が付いたか。



130m程の左に中央に水路（星川）がある星川通りがあり、西側へ入った所に星川の水源であった「玉の池」がある竹井本陣別邸の「星溪園」がある。（10：15～20）園内散策。



星溪園

星溪園は池泉回遊式庭園で、熊谷市の産業・土木面に大きな功績を残した竹井澹如翁によって慶應年間から明治初年にかけて造られました。

由緒

元和9年（1623）、荒川の洪水により当園の西方にあった土手（北条堤）が決壊し、池ができました。その池には清らかな水が湧き出ることから、「玉の池」と呼ばれ、この湧き水が星川の源となりました。江戸時代の終わり、竹井澹如が、そのほとりに別邸を設ける計画を立て、「玉の池」を中心に樹木を植え、名石を集め庭園としました。明治17年（1884）には当時の皇后（昭憲皇太后）が来訪され、大正10年（1921）には秩父宮が宿泊されたほか、大隈重信や陸奥宗光など多くの知名士の来遊がありました。

昭和25年、熊谷市が譲り受け、昭和29年に市の名勝に指定されました。平成時代に入り、建物と庭園の整備がなされ、建物は数寄屋感覚を取り入れ、（後略）

建物：「星溪寮」「松風庵」「積翠閣」



街道に戻りＪＲ高崎線・秩父鉄道の踏切を渡り、上越・北陸新幹線の高架を潜って進むと国道407号線に合流。200m弱で荒川大橋で荒川を渡る。旧街道は荒川大橋の少し下流で渡っていた。



橋の上からの眺望は素晴らしく、秩父の左端に大山、丹沢・秩父・雪をかぶった浅間山、榛名、赤城の上毛の山々、谷川、日光連山が遠いがすっきりと見えた。

荒川大橋は長さ845.9m。渡り切るのに13分位かかった。ここの川幅も広いが、ここから15km程

下流の鴻巣市滝馬室と吉見町大和田との間、御成橋の上流630mの荒川の川幅が日本一広く、2537mである。今日の荒川大橋の3倍とは。



渡った所に「荒川大橋の橋門構」が残されている。(10:46)



「荒川大橋のあゆみ」説明板がある。

荒川大橋のあゆみ

かつて熊谷と村岡の間には木橋が架けられていました。しかし、幾たびの洪水による破損、交通量の増加などにより度々架け替えられ、永久橋が望まれていました。

そして大正十四年、全長五〇〇mの県下一を誇る「九連トラスト

橋」を架橋。荒川大橋は遂に、全鋼製の永久橋となったのです。

当時の橋梁は、市中心部の重要橋梁に対しては充分な装飾を行い、それ以外の橋梁については簡素な美を求める特色がありました。

荒川大橋の橋門構についても、全体的に欧風の様式で細部にまで配慮がなされており、新しい都市空間を創造する意欲にあふれていた、当時の面影を感じ取ることができます。

ここに残されている橋門構は、明治の文明開化と共にはじまった日本の近代橋梁の先駆けともなる歴史的価値のある構造物（九連トラスト橋の一部）を残すことで、荒川大橋をはじめとする昔人の歩んできた荒川の歴史と、当時の橋梁技術のすばらしさを語り伝えるものとして、今もなお、荒川の見えるこの地に保存されているものです。

参考文献「熊谷市史・通史編」「荒川大橋の変遷」



旧街道を通るため堤防上で左折、坂を下って道なりに右折。河川敷の中の道を進むと土手に突き当たり右折する。角に「九頭龍大権現の祠」がある。（ここまで川幅があった）

九頭龍大権現

荒川右岸、手島土手の下に安置されている石造大権現。「九頭龍大権現」と呼ばれている。信仰の対象となる九頭龍大神は、信州にある戸隠山の祭神・天手力男命（あめのたじからおのみこと）が鎮座される前、地主を担う神であった。この本尊として崇められている龍の信仰が、各地に派生し、水の神、農耕の神として関連する祭礼などの原点が生み出された。

本権現は川辺に位置し、それらの歴史背景の系譜を持ちながら当地に建立されたことが推察される。土手上から下に落下させ、雨乞い祭礼にも使われていた伝承が残されていることから、村岡地域の庶民信仰を明らかにする石造物である。総高約九十センチメートルあり、二段の台上に装飾屋根を付けた石碑が置かれている。原初の建立時期は不明だが、大正十五年（1026年）に再建された。

熊谷市教育委員会・村岡地域文化遺産保存事業推進委員会



この辺りから村岡地区に入る。平良文は平安時代中期、桓武平氏の祖、高望王の子として生まれ、36歳の時、醍醐天皇の勅命で相模国の賊を討伐するために東国に下向、その後、武蔵国熊谷郷村岡に移り住み、また、相模国鎌倉郡村岡に移り、村岡と称した。藤沢市村岡東に村岡城と伝わる場所があり、東郷平八郎が額を書いた城址碑がある。平（村岡）良文は坂東八平氏の祖といわれる。

右折し土手を上ると国道407号線に合流、国道を横切り、県道沿いに進み60m程で左折し、230m程で国道に合流する。合流地点の手前右側に「石尊宮の石燈籠」がある。



石尊宮（せきそんぐう）

「石尊宮」と刻まれた石灯籠。

「石尊宮」とは現在の神奈川県伊勢原市にある大山阿夫利（あふり）神社・石尊大権現の信仰に基づいており、雨降の神として信仰を集め、各地に石造の塔や碑が置かれた。

総高は280センチメートル、寛政二年(1790)の建立年が記されている。

江戸時代、修験道の山として知られる大山の石尊信仰は、石（巨石）崇拝に由来している。

大山は雨降山とも言われ、雨乞いや五穀豊穡、商売繁盛の神仏として多くの信者を集めた。

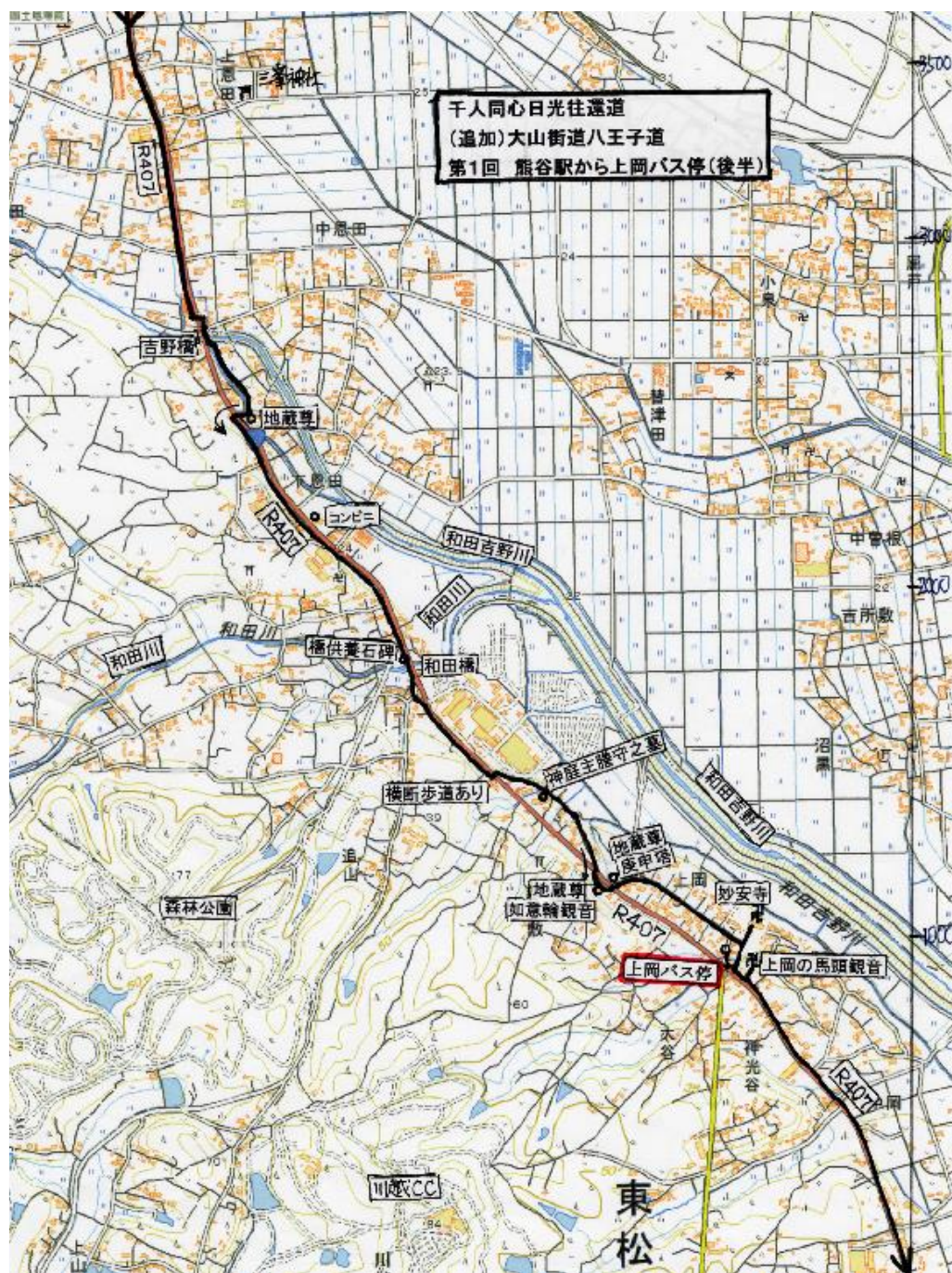
この信仰に対する「大山講」も各地に結成されており、年間を通じた祭礼行事も執り行われている。

平成二十八年四月一日 熊谷市教育委員会・村岡地域文化遺産保存事業推進委員会



国道407号線を1.5km程淡々と歩き、和田吉野川に架かる吉野橋の手前の信号で国道を左に渡り、吉野橋を渡り、国道から分かれた左の砂利道を行く。この道が旧街道。400m程で国道に合流。合流の手前左に祠があり、中に「地蔵尊」が祀られている。





国道（右側を歩く）を700m程進むと森林公園北口の交差点があり、昼食を取るべく店を探す、2軒とも休み。国道脇の空き地で昼食とする。（11：56～12：19）

和田川の手前に「橋供養」の石碑がある。



和田川に架かる和田橋を渡ると直ぐに斜め右への道に入る。**40m**程の三叉路を左へ行くと直ぐに国道に合流。国道を**140m**程で左に渡ると斜め左に入る道がある。この道が旧街道。直ぐの右側に新屋敷神庭主税守の墓の石柱がある。この人が誰なのかは不明。



240m程の三叉路は右に行くと国道に合流す

るので右側に渡る。直ぐ先の左カーブの道（旧街道）を通して国道を渡る。カーブの途中に「地蔵尊と如意輪観音」が祀られている。また、国道を渡った所に「地蔵尊と庚申塔」がある。





ここから斜め左の道を進んで行くと430m程で妙安寺の参道に突き当たり、左に妙安寺の本堂がある。



妙安寺では境内で馬頭観世音毎月19日の縁日が行われていて、露店がいっぱい出て、賑わっていた。
(12:48)

参道から街道・国道407号線に出ると、左側に「上岡の馬頭観音」の堂がある。扉が閉まっていて、観ることは出来なかった。馬頭観世音が祀られているお堂は立派で、これほどの馬頭観世音を祀ったお堂は見たことがない。

馬頭観世音は秘仏で、午年の二月十九日しか開帳されないとのこと。昨年(2019年)4月17日に行った川越街道ウォークで和光市駅の手前、伯楽製鋸所の中にあった馬頭観世音が、ここ妙安寺の馬頭観世音を模写したものである。川越街道で写しを見ておいて良かった。

和光市「上岡写し馬頭観音」の写真は巻末に掲載

馬頭観音堂の境内には、数々の馬頭観音石碑があり、馬の銅像、ミニ牧場があった。(WCあり)





上岡観音の信仰と祭 （抜粋）

東松山市上岡の慈雲山妙安寺の境内に、馬頭観音としては関東地方随一の霊場といわれる上岡観音がある。

今から800年前の文治年間（鎌倉時代）瑞慶和尚によって福聚庵として当地に創建されたのが、この観音の起こりだと伝えられている。そして、武州上岡妙安寺馬頭観音縁起には「この瑞慶和尚は、源氏の大將義経が牛若丸といった頃京都の鞍馬山と一緒に文を学び道を修めた人であり、安置され祀られている馬頭観世音菩薩は瑞慶和尚の作で黄金の尊像が刻み込まれている。この尊像はその昔藤原氏に伝わり、霊験あらたかな観音として尊崇されて来たものであった。そして、蝦夷征伐の折に坂上田村麻呂が、平将門追討の折には、平貞盛が、又陸奥の乱を鎮める為に頼義・義家が何れもこの尊像を奉じて出陣し、見事その役目を果たしたのであった。やがて義家は東国鎮護の為、この尊像を陸奥の国司秀衡に与えた。やがて頼朝挙兵するや、秀衡はこの尊像を義経に授けて鎌倉に下らせ、義経はこれを奉じて京に上り、義仲を討って入洛し瑞慶和尚に会ったが、長くこの尊像を手中におくことは恐れ多いことだといって瑞慶和尚に授けたのである。

ところが、やがて義経は兄頼朝の不信をかい、鎌倉を追われて再び陸奥に落ちのびていった。このことを伝え聞いた瑞慶和尚は、早速尊像を奉じて義経の後を追った。そしてこの地までくると、観音様が夢枕にたちここに止まるようにと告げたという。そこで瑞慶和尚はこの近くに居住していた範義の助けを借りて福聚庵を創建し、尊像を腹籠として祀った」と記されている。

こうして上岡観音は、江戸時代より軍馬の守り観音・農家の馬の観音として信仰を集め、やがて旧陸軍の騎兵隊、馬車、バクロウ、競馬界の人々等から崇められ「上岡観音を参拝しない馬持は、ウマカッタといつてはならない」とさえいわれた。

毎年二月十九日の上岡観音の縁日には絵馬市がたち、先祖伝来の筆法で描いた肉筆の絵馬が売り出される。昔はアシゲ・カゲ・クリゲ・アオ・トチクリゲ・トチカゲ・ツナの七種の馬の絵馬であったが、戦後は牛の絵馬が多くなった。

この絵馬を描く人々をトンヤともいったが、この人達と売る人達とが集まって講をつくり、これを絵馬講といった。昔は総勢200人程であった。

祭り当日には近郷近在は勿論、関東一円、信州・甲州から東北一帯から人々が参詣にやって来た。信者は講をつくって信仰を続け、大いに賑わった。（後略）

原文：前東松山市文化財保護委員長 清水 清

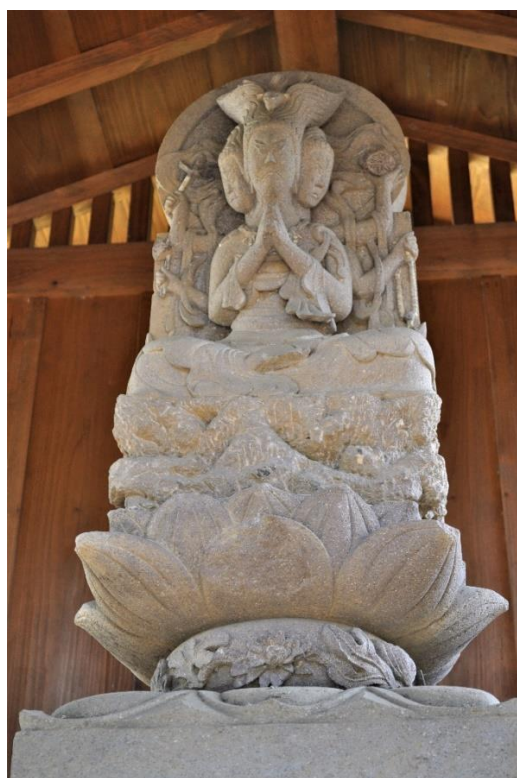
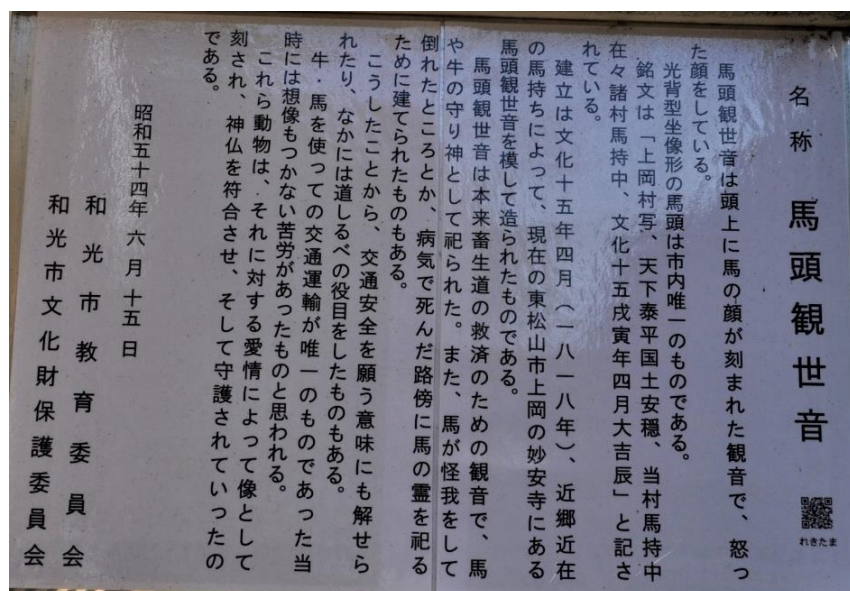


観世音堂から国道を少し戻った所に上岡バス停がある。(13:01) 13時7分発東松山駅行のバスに乗り帰る。



和光市「上岡写し馬頭観音像」





参拝記念スタンプ



妙安寺馬頭観世音御朱印

以上